

## 社会的構築主義と経済学・経営学

神戸大学経済経営研究所

教授 山地 秀俊

最近、人文科学の分析手法である「言説」概念に興味を引かれている。それは理論＝仮説＝実証という通常の科学主義とは異なった分析手法である。もちろんその背後には、認識に関して異なった考え方がある。理論＝仮説＝実証という科学主義の基本的発想も、本来は、帰無仮説が実証データで否定されるか否かを目安に、理論的仮説で述べられた命題の信憑性を判断しているという意味では、本来的には「言説」分析とそれほど認識に違いはないはずである。帰無仮説が否定されても、「そうでないとはいえない」という弱い否定のうえで、ある仮説の信憑性を主張しているだけで、「そうだ」とは一言も言っていないはずである。数の上で例えば100回そうした現象が起きたら95回はこの説明理論で説明がつくといっているにすぎないのであり、しかも代替仮説を無限に試しているわけではないので、本来このことからしても、科学主義の背後には底知れぬ「虚無主義」が潜んでいるはずである。そうであるならば、以下に述べる「言説」分析の認識と大きく変わらないように思われる。

ところが昨今では帰無仮説が否定されると「そうだ」と主張できると解釈され、採択された命題が強くなり上げられる。どういうわけか、こうした「強い」科学主義を徹底すると、たくさんの細切れの科学的仮説を積み上げていけば、世界の、宇宙の真実に到達できるような錯覚に襲われ、またそうした錯覚が今日的にも流行していそうでならない。それに対して、「言説」という発想は、科学主義が忘れてしまった、本来の虚無主義を徹底しているように思えて、いささか古いのではあるが、いわゆる「強い」科学主義が支配的な昨今、却って、新鮮なのである。「言説」を分析手法の一つとする社会的構築主義(Social Constructionism)では、科学主義が外見的に多くのデータを収集してそれを基に切磋琢磨して真実を探し求め、追求しているのに対して、真実は人間が社会関係の中で作り上げるものであるという発想を採っている。真実は人間関係の中で「作られる」のであって、自己犠牲的な努力を払って「見つける」ものではないというのである。したがって科学主義の理論＝仮説＝実証は、社会的に真実を作る一手段でしかない。「科学言説」といわれる所以である。当然、そうした真実の作り方があることを否定するものでは毛頭ない。最も、「科学言説」は、科学主義に照らしても疑問が残るような科学命題を指す場合が多いのも事実である。

「天動説」は何百年にもわたって人類が生活する上で、何の支障もなかった、今日でも大部分の人間にとって何ら支障のない「科学的真実」であり「科学言説」である。天動説は大多数の人間によって作られた「真実」であり、かなり高い有用性も発揮する。それに対して「地動説」はそれほど意識することは無いが、現代の科学主義からしてこれを否定するものはない。しかし「地動説」もまた人々によって科学主義の儀式で作られた「科学言説」であり、映像に例えれば天動説に比べて、パンフォーカスになっただけで、虚無主義的には、写り込んでいない周辺が依然として永遠にあり、永遠のパンフォーカス行為

が待っている。

この議論を経済学と経営学に例えてみよう。近代経済学は19世紀に生まれた学問で科学主義に根ざしている。そして切磋琢磨して求められる世界の真実があるかのような発想で、現実世界の経済現象を解明しようとする。それに対して経営学はずっと小さなコミュニティの中で成立する真理でよしとする学問である。いわば「天動説」でよしとする。社会的構築主義の観点からは両学問は、所詮、言説が作り出されるコミュニティと、そして言説が対象とする現象範囲の大小関係に差異があるに過ぎないのであるが、近代経済学はやはり世界を統一する説明原理があるとする近代的立場であるのに対して、経営学は小さな物語が乱立する刹那的な現代的立場であるように一般的にはまだ思われている。

我々のような発想に立つと、切磋琢磨した科学的成果も、カリスマ性を持つ人間の言動も、「真実形成力」の観点からは同じなのかということになる。当然私の結論は、真実が、人間の納得の上に成り立つ限り「同じ」であるということである。すると大学は科学を追求するところではないのか、お前の立場からだと大学は何をすることかという問いかけがなされることになる。それに対して私は、大学とは「そこに関係する多数派の人々が、科学主義の儀式で真実を作る場所」としか言いようが無い。だから私は、マスコミや宗教は、大学と比べて少しだけ強く、「カリスマ性を持つ人間の言動」を利用した真実形成を行っている制度と考える。しかしあくまで程度の差である。ここで小生が日々主張する命題が出てくることになるが、「大学はマスコミや巨大組織と真実形成の点で競合関係にある」ということである。

最近、脳研究の応用によって、自然科学研究と社会科学研究を融合させる将来の研究方向が打ち出されているように思っている。それは社会的構築主義が、個人の主体性は人間の中に実在するものではなく、社会関係の中で規定される、そして真実もまた社会的に形成される、とする発想の延長線上に来る考え方である。当然、この人間間の社会関係を形成する手段は「言語」である。言語のこの機能は20世紀になって発見されたものであり、基本にこの言語観を置く、構造主義＝社会的構築主義＝言説分析という分析の連鎖は、20世紀の学問で19世紀的科学主義とは異なる。さらにいえば、この言語機能は、人間の脳内活動の結果である。したがって人間の脳内活動によって生み出される言語によって社会的関係が形成され、その関係の中で、個人が主体化され、真実が形成されていくと考えることができる。こうした発想に依拠して、私は残り少なくなった神戸大学での研究で、会計情報の証券市場での機能を検証するコンピュータプログラム実験と脳内実験を組み合わせ、何か新しい発見はないかと、模索している。

しかし現在までの我々の知識水準では、残念ながら我々のような発想では壁に突き当たってしまうことは目に見えている。やはり社会的な政策提言には、科学言説の優劣を何らかの基準でつける必要が出てくる。特に科学言説を科学主義という儀式で生産することを旨とする大学では、どの命題が社会的に真実として様々な局面で採用されるべきかが問われる時に、やはり出来るだけ多く、理論＝仮説＝実証で検証された命題が採用されて、個人的カリスマ性基準が採用されないような社会を作るよう努力することが必要になるのだろうか。しかしあくまでも、フーコーがいみじくも言うように、「真実が問題ではなく、ある命題を誰がどのような状況で真実だと主張するのが問題」なのだということを肝に銘じつつであるが・・・。